

書評

BLAIR, G. M.
JONES, R. S.
SIMPSON, R. H

EDUCATIONAL PSYCHOLOGY.

MACMILLAN. 1954. xiii+601

お茶の水大学心理学研究室

波多野完治

世の中で何よりイサマシイのは、概論を書く学者だが、それよりもつとイサマシイ人がある。それは、その概論を批評する人だ。とある人*がいつている。たしかに一理ある考えに相違ないが、しかし、心理学のような学問では、概要をかくの、むずかしければむずかしい程、その概論の必要があるのだ、といえるかもしれないのである。書く必要があれば、又それをよんで批評する人がいなければならぬ。

最近の傾向の一つとして、概論書の構成即ち章の分け方をかえたり、又は叙述を新しくしようとする努力がみられる。だからどんな概論も同じようであった一昔(又は二昔)前とちがつて今日では、どんな概論もちがった様相を出そうと骨をおるようになった。こういう形勢の中では概論はどんなものでも一冊よめば、入門になるというわけにいかない。概論書の書評が今後ますます要求されるようになり、イサマシクない学者までが、イサマシクならざるを得ない事態を生じているのではなかるうか。ブレーア他二氏のこの「教育心理学」は、例の有名なゲーツ他三氏の「教育心理学」と同じ本屋から出たものである。ゲーツ・ジャーシルド等の教育心理学はベストセラー教科書として定評があり、アメリカ将兵の通信教育教科書として採用されるまでになった。われわれが戦後はじめて接した「教育心理学」の概論はこれであった。こういうよい本をもつていて出版社が、新しく同じ「教育心理学」を出版するには、相当な理由がなくてはならない。

事実、このブレーア等の概論には、かなり多くの特長がみられる。

第一は叙述を大変やさしくしてある、ということである。ゲーツ・ジャーシルドのもの、むずかしい、という程のものではないが、ブレーア等のこの本はもつとやさしい。おそらく「教育心理学」という名前をもつた本のうちで

* EINGER, F. W., Textbooks and General Psychology. *Psychol. Bull.*, 1954

はもつともやさしく書いてある本の一つではあるまいか。術語はすくなく、学説の説明には実に苦心してある。

第二は戦後、すなわち一九四五年以後の研究や考え方に材料の大部分をあおいでいる、ということである。ゲーツ・ジャーシルドの本は一、二年前に改訂版が出たがいわゆるメイン・ボディは1930年代の研究からなつてゐる。この概論書はそれより一時代新しい研究をひろつてまとめたのである。新しいものがいつもよいとは限らないのだが、しかしこういうやり方は一つの意味をもつているといえよう。

(参考にした本で特にNSSSFの年報をよくつかつてゐるのが目につく。NSSSFは日本の大学のどこの研究室でもそろえてもつていないが、この本でみると、どうもこれだけはそろえてもつていないといけないうだ。少くとも1940年ぐらいから後はどこかの大学でそろえたいものである。)

内容に入つてみると、次のようなことがある。

(1) 発達に関する記述が割合にすくない。

全部で600頁の本だが、そのうち発達の部分が80頁しかない。全体の七分一をみたくないのである。ついでに600頁をどうわけているかをごく大体の頁数にして示すと次のようである。

第一部	序論	10 頁
第二部	成長と発達	80 頁
第三部	学習	240 頁
第四部	適応と指導	100 頁
第五部	測定と評価	110 頁
第六部	教師の心理	40 頁
	さくいん	20 頁

これで見るとわかるように、学習のところを最大の頁数をとつている。又叙述も、のちにふれる通り、わるくない。

(2) 発達を機能別にでなく、年令的に、発達段階としてとりあつたつてゐる。これは頁数との関係から来たのかもしれない。精神機能別にのべていたのでは児童と青年とを八十頁で書ききれぬものではない。ハヴィガーストの「発達の課題」の考えを重要視してこれを大きくとりえていることが注目される。

(3) さきにも一寸のべたように、学習の部分が非常に多い。そこで一寸考えると、これは昔風の学校心理学即教育心理学、という考えによつてかかれたもののような印象をうけるかもしれぬ。だが、中味を検討すると、大変なちがひであることがわかる。著者たちが「学習」といつているのは全人格的な過程なので、単なる知識のつめこみではない。だから、三十年前の教育心理学のように、勉強の心理学の本ではなくて、この本はむしろガイダンスの心理学

の本なのである。学習の場面においても全人格的なガイダンスの観点を強調して考えていこうとするのである。

- (4) この傾向は学習の部分全体にあらわれているが、特に次の三点につよくあらわれる。
- (a) レディネスにおいて、素質的成熟と同時に感情的成熟を重要視すること。
- (b) 学習を三つにわけるとリーウインの立場をとり入れていること。学習理論そのものとしては、トルマン説とリーウイン説との総合をねらっているようであるが、モチベーションや移転についてはリーウインの考えの影響は甚だ大きい。リーウインの学習理論だと、「構造の変化」は学習の一部に適用されるだけになり、「ナレ」又は「文化習熟」などが考慮されてくるが、学習はどうしても全人格的問題にならしむるを得ない。
- (c) 学習の「社会心理学」をおもくみて一章をさしていること。これは当然いわゆる「教え学ぶ」場面を中心におくことになり、先生と生徒との感情的むすびつきに問題がいく。即ちガイダンスが学習に適用されてくる。
- (5) 学習理論として教育実践への適応力はどうか。この点はわたしは専門でないから、よくわからぬ。学習についての理論化状況をあつさり手ぎわよく紹介して、すぐにレディネスやモチベーションなどの教育的考察へ入ってしまった点は、学習理論のジャングルへ学生をまよこませぬために、よい方法なのではないかともおもわれる。
- (6) 学校環境における学生生徒のガイダンスの部分はこの本の中心であろう。学習論についてさえガイダンスが重視されているのであるから、適応とガイダンスの論がすぐれているのは当然ともいえる。特に「学校における規律」をとりあつた部分は変つている。丁度わたしはこの本と同じころ、オゴロドニコフ・シンピリョフの「ソヴェート教育学」を平行してよんでいたのだが、この二書の規律論を比較して考えることはわたしには実に興味のあることであつた。
- (7) ガイダンスにケース・ヒストリーを引用するのに生徒のつづり方をよくつかつて効果をあげている、又生徒につづり方を書かせることをすすめている。測定評価の章ではエッセー型のテストをすすめる等、生徒の作文に重点がおかれている。これも今までわたしの読んだ教育心理学の概論書にはあまりみられなかつたことで、著者たちの新しい試みでは

かろうか。生徒の人格歴も出してあるが、そのような客観的のものとならんで生徒自身の書いたものを上手につかっている、この点は、日本のようにつづり方の盛んな国では、尊ぶべき概論手法のようにおもわれる。

- (8) 教師の心理に大きな頁をさいていること。この部分はゲーツ・ジャーシルド等の本にもあつたが、ブレーアのこの本では、ここがかなり充実して来ている、しかも、その教師の心理の生徒に及ぼす影響がよくとかれている。教師間の対立があるとそれが対生徒への態度にもちこまれ、いろいろなトラブルがおこることを説いている点など、わたしは大変感心した。先生の精神衛生は、先生自身のためにばかりでなく、生徒のためにも必要なのであることが強調される。

以上のような特長の列記から知られるように、この本は子どもの全人格的発達に視点をあつた、ガイダンス中心の教育心理学だといえる。そうして、ガイダンスには一定の哲学が必要であるが、又、精神衛生的見地は、その立場から逆に哲学(教育哲学)に対して有力な発言をすることができ、時には哲学自体を修正させることも出来る。これは教育心理学が部分機能の教育過程の心理だけを取りあつたつていたのでは、あまり、有力にははたらき得ない方向なのかもしれない。心理学自体が全人格を問題にしたときはじめて次のような発言が可能になつたのではあるまいか。

「教育哲学では、たとえば生徒の協力行動を発達させるのがのぞましい、と主張するかもしれない。このときに、教育心理学ではそのような協力行動をつくり出すやり方や手段を考え出さなくてはならないのである。だが、こういうたからといって、教育心理学と教育哲学とのはたらきは相互に排除し合うもので、又、相互に敬愛し合うことが不可能などと推定してはならない。哲学者たちの教育説の多くは心理学者によつて実際にためしてみなければならぬ。又他方からいうと、心理学者たちの発見した事実は哲学者たちをして自分の学説を変更せざるを得なくすることもあるのである。子どもはどんな風にして学んでいくものか、又各発展段階に応じて何を学んでいくものかを知ることには哲学者が教育についての現実的な目的を設定するのにたすけになる。多くの教師は哲学者でもあり又同時に心理学者でもあるのだ。即ち、彼等は、どちらに向つて進んでよいかということと、又、どうしてそこへ到達したらいいかということと双方に関心をもつていなくてはならぬ。(5~6頁)